情報教育にかかる未来

情報化社会をどう生きるか 3
How do you live in an information society?

『情報の本質』を学べ

滋賀大学　松原　伸一　教授

社会の情報化に伴って様々な問題が起こってくる。これについて滋賀大学の松原伸一教授にお話を伺った。

その問題の一つに情報格差（デジタルデバイド）がある。これには世代間格差や地域間格差、所得格差などがあるが、高校生にとっての情報格差とは何だろうか。松原教授は「それは教育格差ではないか」と話す。「学校で情報を学ぶか学ばないかによってメディアリテラシー（情報を批判・判断・活用する能力）の有無が分かれる」とのことだ。その身近な例として大学進学がある。松原教授は「最近は大学の情報を調べるために本よりもインターネットが多く使われている。前者と後者では情報量や情報入手の効率に大きな差がある」という。さらに就職活動も同様で「今の時代、会社の採用試験へのエントリーはインターネットで行われている。それができないでいると会社から相手にされない」と松原教授は話す。つまり、パソコンなどの情報機器を使えないと大学進学や就職活動で不利になってしまうというのだ。これらの情報格差によって不利な立場に立ってしまうと最終的には「社会から排除されてしまう」という危険性があるのだ。この問題に対しては、文部科学省が2020年までに学校教育において一人1台のパソコンが使える環境を整える目標を掲げているそうだ。

また、情報化は人間の思考の分断化をもたらす。これは一つの思考の過程に電話やメールなどが割り込むことによって起こる。例えば、メールで相手から質問を受けたとする。自分はすぐに返信しようとその答えをインターネットによって検索し、入手した情報でとりあえず返信する。そこには自らの考えは含まれていない。松原教授は「これは非常に恐ろしいことだ。このやりとりを子供の頃から続けていると自分で考えて答えを導き出すことができない人間になってしまう」とその危険性を話される。

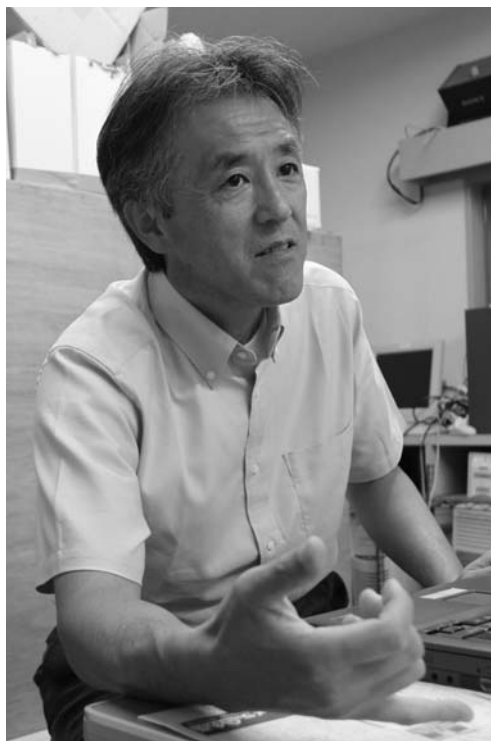
こういった危険をどのように防げばいいのだろうか。松原教授は「それは学校の情報教育にかかっている」と話す。「今後求められるのは従来のパソコンを使って学ぶ『情報化教育』ではなく、情報とは何かということを学ぶ『情報科教育』であり、今の学校教育ではほとんど行われていないのではないだろうか」と自らの意見を述べられた。

最後に松原教授は「情報化社会に参加するためには情報機器が使えるだけではダメ。情報とは何か、情報がどのように社会を構成しているのか、情報にはどんな危険があるのか、情報をどう利用すべきなのかといった『情報の本質』への理解が必要だ」と情報化社会に飛び込んでいく若者たちに向けて話された。（眞）

▲パソコンなどの情報機器に囲まれた研究室で、松原教授はiPadを用いて情報化社会の課題を語られた。

情報環境を整えるのは大人の責任

情報科　山本　陽司　先生


▲東高の情報教育の中枢を担う山本先生は、情報環境の整備について話された。

「情報環境を整えるのは大人の責任」と話されるのは情報科の山本陽司先生だ。情報機器を使うことのできる環境について「大人が積極的に導入を進めなければならない。学校で言えば生徒には何の責任もない。情報科では生徒が情報機器に触れる時間を多く確保し、情報嫌いを作らないように努めている」とのことだ。

ネット掲示板などでの誹謗中傷については「人間はもともと悪くないのだと思う。マナーを理解していながらネットの匿名性に隠れてやってしまうのだろう」との見解を示された。その解決については「言いにくいことだが完全に無くすことは不可能と思われる」と述べた上で「学校では情報科だけでなくHRなどで先生から働きかけることが必要。社会全体ではマスメディアにその役割がある」と意見を話された。

また、社会の情報化については「生活が至るところで便利になってきている。昔とは違い、今は歩きながらにしてケータイでニュースなどの情報を入手したり、様々なサービスを受けたりすることができる。これからが楽しみ」とのことだ。最後に、東高生に向けて「将来は開発者として情報環境をさらに整えてほしい。そして、モラルを次の世代に伝えていってくれることを期待している」と話された。（眞）

『まずやってみよう』の精神を持って

情報科　坂本　秀誠　先生

▲坂本先生は情報嫌いにならないように「情報に親しんでほしい」と話された。

現在社会で問題になっている情報化の課題について、情報科の坂本秀誠先生に話を伺った。

まず、社会がさらに情報化することで新たに生まれると思われる問題について尋ねてみると「携帯やインターネットが普及することによって今まで直接体験していたものがバーチャルで体験できるようになってしまい、実体験が乏しくなってしまう」と話された。次に情報が正しいかどうかの判断をどうすれば良いのかについては「疑いの目を持って情報を見て、鵜呑みにしないことが大切」と答えてくださった。最後に先生が授業で情報を教えるとき、どのようなことに注意しているか伺ってみると「情報嫌いにならないように、『まずやってみよう』の精神を持ってもらおうとしている。計算も大切だけど、画像や音楽に触れてもらうことで情報に親しんでもらおうとしている」と語ってくださった。（渚）

まとめ　デジタルとアナログの使い分けを

インターネットが登場して約15年。よく「便利になった」という声を耳にする。確かに、メールの普及により時間や場所を気にせずにコミュニケーションが取れるようになったり、インターネットで検索すれば、すぐに欲しい情報を手に入れたりすることができる。

しかし、便利な面ばかりを見て、その裏に掲示板上での誹謗中傷の問題や情報格差などの多くの問題があることを忘れてはならない。では、そのような社会で生きる私たちはどうすべきなのか。

その答えは松原教授のお話の中にあった。「情報機器を使えるだけではだめだ。『情報の本質』を学ばなければならない」と先生はおっしゃった。情報機器を活用するだけで終わらずに、『情報』をうまく活用しなければならないのである。

そのためにはネット掲示板やブログなどのウェブサービスの特性を知ることと、そこに書いてある情報の真偽を見極める能力、つまりメディアリテラシーが必要なのだ。

私たちは全ての作業をデジタルに依存する傾向がある。しかし、その作業の中にはアナログで作業した方が効率の良いものもある。全てをデジタルに依存するのではなく、『アナログの良さ』を再発見し、デジタルとアナログをしっかりと使い分けることが大切だ。

（2年　南部久貴）

お食事処
八ふ代
彦根駅前　☎0749(22)1159

すてきな味で、いいおつきあい
近江牛肉専門店　千成亭
〒522-0041
彦根市平田町808番地